

ネヘミヤ記8章 「みことばによる民の回復」

1A 律法の朗読 1-12

1B 一つとなった民 1-3

2B 解き明かす教師たち 4-8

3B 敬虔な悲しみ 9-12

2A 律法の学び 13-18

1B ベレア人の心 13-15

2B 喜びの回復 16-18

本文

ネヘミヤ記8章を開いてください。私たちは、エルサレムの城壁の再建が完成した後、ネヘミヤとイスラエルの民が何をしたかの記録を読んでいます。7章にて、ネヘミヤと指導者が行ったのは、門番をしっかり立てること、それから系図を捜させました。バビロンからゼルバベルとヨシュアが率いる帰還した民の系図です。そして私たちは、ここに神の民にも、一人一人の名が天に書き記されているという登録が行われている話をしました。私たちは、自分たちで選んで神の共同体に入っているのではなく、神に恵みによって選ばれて、御体の中に入っています。

そして次に行ったのが、律法の朗読です。ここにこそ、民が霊的に回復し、大いなる喜びが回復されました。

1A 律法の朗読 1-12

1B 一つとなった民 1-3

8章は7章の最後の節の続きなので、7章72節の後半から読みます。

7:72b イスラエルの子らは自分たちの町々にいたが、第七の月が来たとき、8:1 民全体が、一斉に水の門の前の広場に集まって来た。そして彼らは、【主】がイスラエルに命じたモーセの律法の書を持って来るように、学者エズラに言った。

時は、「第七の月」とあります。城壁の門に扉が取り付けられた時、エルルの月 25 日であると(6:15)とありますが、エルルの月は第六の月のことです。ネヘミヤが、エルサレムの長や門衛などを任命し、系図を調べさせましたが、それが終って、人々が自分たちの町々に戻りました。ところが、第七の月が来たら、民のほうから全体に、一斉に集まって来たのです。直訳は、「一人の人のように」です。

私たち一人一人は、それぞれに考えや思い、確信があって異なる意見を持っていますが、しかし、そういったことを超えて、彼らの心の中に大いなる渴望が起こりました。律法を知りたい、律法を聞きたいという渴望です。「アモ 8:11 見よ、その時代が来る。——【神】である主のことば——そのとき、わたしはこの地に飢饉を送る。パンに飢えるのではない。水に渴くでもない。実に、【主】のことばを聞くことの飢饉である。」食べ物がなくなることながら、それ以上に、民が自分たちに命となる、御言葉がほしいと強く願ったのでした。

「水の門」という場所が意味深です。この「水の門」の外に有名な「ギホンの泉」があります。イエス様は仮庵の祭が終わった大いなる時に、「ヨハ 7:38 わたしを信じる者は、聖書が言っているとおり、その人の心の奥底から、生ける水の川が流れ出るようになります。」と言われました。¹もしかしたら、イエス様はネヘミヤ記 8 章のここでの出来事を意識して、その言葉を語られたのかもしれませんが。御言葉が語られる中で、聖霊が働かれ、そこに命の水の川が流れ出ます。



2 そこで、第七の月の一日に祭司エズラは、男、女、および、聞いて理解できる人たちすべてからなる会衆の前に律法を持って来て、3 水の門の前の広場で夜明けから真昼まで、男、女、および理解できる人たちの前で、これを朗読した。民はみな律法の書に耳を傾けた。

第七の月の一日目は、レビ記 23 章によると、ラツパを吹き鳴らす日です。神による清算が始まります。そして民の贖罪、罪の赦しが行われる「宥めの日」が十日にあり、神の約束にあずかったことを喜び、楽しむ仮庵の祭りが十五日から始まります。この時、第七の月の一日にすべての人々が集まりました。男も女も関係なく、そして「聞いて理解できる人たちすべて」は、基礎的な国語の能力を持っている人々ということです。つまり小学生高学年ぐらいの年齢であればそこに参加していたことでしょう。つまり、主のみことばが全ての人のために開かれ、明らかにされていたということです。

そして「夜明けから真昼まで」行っています。一日の四分の一、6 時間ぐらいは費やしていたことでしょう。もちろん説教が長ければよいというものではないですが、聖霊が強く働かれる時は、神のことばを聞くのに疲れることはありません。そして大事なのは、「朗読した」というところです。後で説明が出てきますが、これは単純に音読したということではありません。他に彼を助けるレビ人や祭司がいて、それを説明していきます。エズラが大きな声で読み、はっきりと読み、それから少

¹ <http://meigata-bokushin.secret.jp/index.php?%E3%81%BF%E3%81%93%E3%81%A8%E3%81%B0%E3%81%AB%E3%82%88%E3%82%8B%E7%A5%9E%E3%81%AE%E6%B0%91%E3%81%AE%E8%82%B2%E6%88%90>

し合間において、レビ人たちがそれに少しの説明を付けて話していったのかもしれませんが。これを現代の教会では、「聖書講解」といいます。解き明かしながら、聖書を講読していくということです。そして民は、「律法の書に耳を傾けた」とあります。エズラの言葉ではなく、神の言葉に耳を傾けました。聖書の言葉そのものに何が書かれているのか、それを理解するのに意識が集中していたということです。

2B 解き明かす教師たち 4-8

4 学者エズラは、このために作られた木の壇の上に立った。彼のそばには、右手にマティテヤ、シエマ、アナヤ、ウリヤ、ヒルキヤ、マアセヤが立ち、左手にペダヤ、ミシャエル、マルキヤ、ハシュム、ハシュバダナ、ゼカリヤ、メシュラムが立った。5 エズラは民全体の目の前で、その書を開いた。彼は民全体よりも高いところにいたのである。彼がそれを開くと、民はみな立ち上がった。6 エズラが大いなる神、【主】をほめたたえ、民はみな両手を上げながら「アーメン、アーメン」と答え、ひざまずき、顔を地に伏せて【主】を礼拝した。

なんというすばらしい光景でしょうか。エズラが台の上に立ったのは、彼が目立つためではなく、彼がたしかに律法の巻き物を開くのを民が直接、見るためでありました。民がこれから聞くのは、神の言葉そのものであることを目で見て、確かめるようにさせたのです。宗教改革後に建てられた教会を、ヨーロッパで見ることができます。ルターも、スポルジョンも二階から御言葉を取り次いでいる絵が残っています。そしてエズラが大いなる神、主をほめたたえました。当時の人々は、躍動的に応答しています。手を上げて、「アーメン、アーメン」と答えて、さらにひざまずいて、顔を地に伏せています。そして主を礼拝しました。今のイスラム教徒が頭を地面につけてひれ伏して礼拝しますが、あんな感じですよ。

大事なことは、律法を朗読すること、主をほめたたえ、礼拝することが切り離されていないことです。私たちはどちらかに偏りがちです。一つは、聖書を学びのために行っていることです。日本は武士道や儒教の文化があるためか、聖書研究を中心として集まりを展開させました。しかし、神の言葉を読むということはそのまま、神へ礼拝を捧げることにつながらなければ意味がありません。人格ある神ご自身に自分自身が心動かされなければいけません。もう一つは、御言葉なしの礼拝です。詩篇 138 篇 2 節には、新共同訳で読みますが、「その御名のすべてにまさって／あなたは仰せを大いなるものとされました。」とあります。神ご自身がご自分の言葉を、ご自分の名の全てに優って大いなるものとされたのです。礼拝の中で御言葉を語るということは、神の名を大いにほめたたえることと同じです。

7 ヨシュア、パニ、シレベヤ、ヤミン、アクブ、シャベタイ、ホディヤ、マアセヤ、ケリタ、アザルヤ、エホザバデ、ハナン、ペラヤなどレビ人たちは、民に律法を解き明かした。その間、民はその場に立っていた。8 彼らが神のみおしえの書を読み、その意味を明快に示したので、民は読まれたこ

とを理解した。

ここでは「その意味を明快に示した」というところが、共同訳では、「はっきりと朗読し、またその意味を明らかにした」となっています。口語訳では、「神の律法をめいりように読み、その意味を解き明かして」とあります。そこに書かれていることが明らかなるようにして読んでいきます。まさに、私たちはこのことを礼拝で行っています。御言葉が高められるところで、しかも理解なしの音としての朗読ではなく、理解しながら読まれていくことによって、神の名がほめたたえられるのです。

私たちの教会に、ある時、以前、ユダヤ教に改宗したという兄弟がいらっしやいました。ユダヤ教の改宗者なのですが、それからイエスを自分のメシアとして受け入れたという方です。この方が、礼拝の聖書を一節ずつ読んでいく、私たちの礼拝に集われました。そして彼は、「心が喜んだ。かつてのシナゴグ時代を思い起こす。」と言われたのです。そうです、律法を朗読して、それを明瞭に語り、そして説明を加えて読んでいくことは、新約時代のユダヤ教の会堂また、教会にも受け継がれていったのです。

エペソにある教会に、テモテが牧者となっていた時、律法や系図についての枝葉末節なところで議論していた者たちが入り込んできた時、パウロはテモテにこのように命じました。「私が行くまで、聖書の朗読と勧めと教えに専念しなさい。(1テモテ 4:13)」「あなたは務めにふさわしいと認められる人として、すなわち、真理のみことばをまっすぐに説き明かす、恥じることのない働き人として、自分を神に献げるように最善を尽くしなさい。(2テモテ 2:15)」聖書の言葉を通読し、通読するだけでなく、しっかりと朗読し、説明を加えながら朗読するのです。

この時に、神の聖霊は私たちの心に働いてくださいます。「その御霊のことばによって御霊のことを説明するのです。(1コリント 2:13)」とパウロは言いましたが、聖書の言葉は聖霊によってそれぞれの著者に与えられ、そしてそれを解き明かす者も聖霊によって解き明かします。そして、聞く者たちも御霊によって、その言葉を理解するのです。

私たちの主イエスご自身が行われました。二人の弟子が、エルサレムから離れてエマオという村に行く途中でした。復活されたイエス様がついて行かれました。そこでこうあります。「ルカ 24:27 それからイエスは、モーセやすべての預言者たちから始めて、ご自分について聖書全体に書いてあることを彼らに説き明かされた。」とあります。聖書全体から、モーセの律法から始まり、預言者に至るまで、ご自分についての事柄を説き明かされたのです。その話を聞いていた弟子たちが、こう言いました。「道々お話しくださる間、私たちに聖書を説き明かしくださる間、私たちの心は内で燃えていたではないか。(24:32)」心が燃えてきました。かつての主と共にいた喜びが取り戻されました。律法の解き明かしによって、彼らは理解し、そして喜びに満たされたのです。

3B 敬虔な悲しみ 9-12

9 総督であるネヘミヤと、祭司であり学者であるエズラと、民に解き明かすレビ人たちは、民全体に向かって言った。「今日は、あなたがたの神、【主】にとって聖なる日である。悲しんではならない。泣いてはならない。」民が律法のことばを聞いたときに、みな泣いていたからである。

律法の中に、イスラエルが主に背いたら、これこれの呪いがあると書かれていて、それらが見事に自分たちの先祖たちに起こったことを悟ったのでしょう。そして自分たちが律法に書かれていることをまるで行っていない、自分は神に背いているのだ、と気づきました。これが律法の働きです。「ロマ 7:12-13 ですから、律法は聖なるものです。また戒めも聖なるものであり、正しく、また良いものです。それでは、この良いものが、私に死をもたらしただけでしょうか。決してそんなことはありません。むしろ、罪がそれをもたらしただけです。罪は、この良いもので私に死をもたらしることによって、罪として明らかにされました。罪は戒めによって、限りなく罪深いものとなりました。」そして、律法の完成者であられるキリストに、その死に導かれるのです。御言葉によって、聖霊による罪の自覚が与えられ、悔い改めることが可能になります。

そして罪の自覚によってもたらす悲しみについて、使徒パウロは、悔いの生じない悔い改めへの導かれることを教えています。「Ⅱコリ 7:10 神のみこころに添った悲しみは、後悔のない、救いに至る悔い改めを生じさせますが、世の悲しみは死をもたらしします。」神の御心に添った悲しみと、世の悲しみがあると言っています。自分のした愚かなことで、自分が惨めな思いをしているから、自分のしたことの種を蒔いているから悲しんでいるのです。家庭内で言葉の暴力をふるう男がいるとします。妻は、我慢できなくなり、実家に戻りますと言います。すると態度が急に変わり、「申し訳なかった。謝る、どうか家に帰って来てくれ。」と言います。それで妻が戻ってくると、また同じことを繰り返すのです。自分の気持ちの中で悪い思いになっているから、ごめんなさいと謝っているのであり、本当に思いを変えているのではないのです。しかし、神による悲しみは、悔い改めを伴います。自分が神に対して罪を犯したことを知ります。そして、そのことを悔いて、悲しみます。その罪を神に対して告白して、捨てます。こうした悔い改めが生じるのが、神による悲しみです。

10 さらに、彼は彼らに言った。「行って、ごちそうを食べ、甘いぶどう酒を飲みなさい。何も用意できなかった人には食べ物を贈りなさい。今日は、私たちの主にとって聖なる日である。悲しんではならない。【主】を喜ぶことは、あなたがたの力だからだ。」11 レビ人たちも、民全体を静めながら言った。「静まりなさい。今日は聖なる日だから。悲しんではならない。」

ここでエズラとネヘミヤは、食べたり飲んだりして、喜びなさいと命じています。神のもたらす悲しみは、その悲しみが目的ではありません。悔いのない、救いに至る悔い改めが悲しみの目的です。真実な罪の悔い改めは、必ず喜びをもたらしします。私たちはその時に、いつまでも悲しむ必要はありません。悔い改めた者には、神は惜しみなく憐れみを注いでくださり、その罪をきれいに拭い

去ってくださいます。ですから、喜びが溢れます。

そして、イエス様ご自身が喜んでくださり、いっしょに食事をするのです。ラオディキアにある教会に対して、イエス様は食事を用意されることを約束されました。「黙 3:19-20 わたしは愛する者をみな、叱ったり懲らしめたりする。だから熱心になって悔い改めなさい。見よ、わたしは戸の外に立ってたたいている。だれでも、わたしの声を聞いて戸を開けるなら、わたしはその人のところに入って彼とともに食事をし、彼もわたしとともに食事をする。」イエス様が、罪人や取税人と食事をされた時のことを思い出してください。パリサイ人は、取税人や罪人となぜ食事をするのかとつぶやきました。それでイエス様は言われます。「ルカ 5:32 わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招いて悔い改めさせるためです。」悔い改めた者とは、イエス様は親しく交わってくださるのです。

ネヘミヤとエズラは、「聖なる日」であることを強調しています。主に聖別された日だからこそ、この喜びを大切にしなければと命じているのです。ダビデは言いました。「満ち足りた喜びがあなたの御前にあり楽しみがあなたの右にとこしえにあります。(詩篇 16:11)」使徒ペテロは言いました。「あなたがたはイエス・キリストを見たことはないけれども愛しており、今見てはいないけれども信じており、ことばに尽くせない、栄えに満ちた喜びに躍っています。(1ペテロ 1:8)」ガラテヤ書 5章には、喜びは御霊の実ある愛の現れとして、列挙されています。

さらに、「【主】を喜ぶことは、あなたがたの力だからだ」と言っています。なぜ力になるのか？喜びは、幸せと違って、周りの状況ではなく、主との関係に基づくからです。幸せは状況に拠りけりです。喜びは持続するものであり、内から溢れるものです。関係に基づいているからです。これを赤ん坊と母親との関係に当てはめればよいでしょう。赤ん坊は、何か少し不快になれば気分を害して泣きます。数秒前は泣いているのに、今は笑っている。時には泣いているのと笑っているのを同時にする芸当を持っています！しかし母親はどうでしょうか？彼女は、彼女の感情は否定的なものが多いです。夜中にお乳のために起きる時は眠い。赤ちゃんが泣くときはうるさい。時々、にこやかになるので嬉しくなります。けれども、その喜びは持続的なのです。眠くても、赤ん坊に乳を与えているという喜びがあります。泣いていても、あやしている忍耐の中に喜びがあります。気持ちの上では辛くても、心にはその子への愛が自分を支えているのです。

ですから、私たちは悲しみながら喜ぶことができます。キリスト者の葬儀がそのもっとも典型的な証しです。その人がいなくなったことは悲しいです。しかし、その人がキリストのうちにいる、天にいて、そしてキリストが戻ってこられる時に復活し、自分も引き上げられる。そこで共に会うことができる。この希望があるので喜んでいきます。栄えに満ちた喜びに満たされます。また、迫害などの試練を受けている時でさえ、私たちは喜ぶことができます(1ペテロ 4:13 等)。そして、この喜びは誰も奪い去ることはできません。イエス様は、これから十字架につけられるという時に弟子たちに

こう語られました。「ヨハ 16:22 あなたがたも今は悲しんでいます。しかし、わたしは再びあなたがたに会います。そして、あなたがたの心は喜びに満たされます。その喜びをあなたがたから奪い去る者はありません。」奪い去ることはできないのです。

12 こうして、民はみな帰って行き、食べたり飲んだり、ごちそうを贈ったりして、大いに喜んだ。教えられたことを理解したからである。

すばらしいですね、ここでネヘミヤは、彼らの大いなる喜びは、「教えられたことを理解したから」と言っています。あのエマオに向かっている二人の弟子もそうでした。主の語られたことを理解して、それで心が燃えていました。

2A 律法の学び 13-18

1B ベレア人の心 13-15

13 二日目に、民全体の一族のかしらたちと、祭司たち、レビ人たちは、律法のことばをよく調べるために、学者エズラのところに集まって来た。14 そして彼らは、【主】がモーセを通して命じた律法に次のように書かれているのを見出した。すなわち、「イスラエルの子らは第七の月の祭りの間、仮庵の中に住まなければならない。15 また、『山へ出て行き、オリーブの葉、野生のオリーブの木の葉、ミルトスの葉、なつめ椰子の葉、また茂った枝木などの枝を取って来て、書かれているとおりに仮庵を作るように』と、自分たちのすべての町とエルサレムに通達を出して、知らせなければならない」とあった。

彼らは律法の朗読だけをするに留まりませんでした。律法を調べていきました。この時は、律法は全ての人の上に渡っているのではないので、民の一族のかしらだけが来て、そして祭司とレビ人が集まって、学者エズラが調べていきました。すると、レビ記 23 章にあるように、第七の月の十五日に、仮庵の祭りがあり、その時は仮庵の中に七日か住まなければいけないことを見つけました。彼らの興奮が伝わってきます。自分たちで調べて、それで神の御心を知ることができました。

ここを読むと、使徒の働きにあるベレアの人々のことを思い出します。「使 17:11 この町のユダヤ人は、テサロニケにいる者たちよりも素直で、非常に熱心にみことばを受け入れ、はたしてそのとおりかどうか、毎日聖書を調べた。」パウロは、律法と預言書から論じました。「17:3「キリストは苦しみを受け、死者の中からよみがえらなければならなかったのです。私があなたがたに宣べ伝えている、このイエスこそキリストです」と説明し、また論証した。」とあります。はたして、その通りかどうか聖書で調べたのです。

2B 喜びの回復 16-18

16 そこで民は出て行き、枝を取って来て、それぞれ自分の家の屋根の上や庭の中、また神の宮

の庭、水の門の広場、エフライムの門の広場に、自分たちのために仮庵を作った。17 捕囚から帰って来た全会衆は仮庵を作り、その仮庵に住んだ。ヌンの子ヨシュアの時代から今日まで、イスラエルの子らはこのようにしていなかったのです、それは非常に大きな喜びであった。

仮庵の祭りは、イスラエルの民が荒野の旅をして、無事に約束の地に戻ってきたことを思い出し、お祝いするものです。荒野の旅で仮庵しかなかった時のことを思い巡らすために、祭りの期間中、その中に住みます。そして八日目は、無事に約束の地に入ったことを思い起こします。これを回復させたことは、とてつもない喜びでしょう。なんと、ヨシュアの時代から行っていなかった、約束の地に入ってから以降、まともに行っていなかったということになります。バビロン捕囚から帰還したという回復だけでなく、約束の地に入った時に取り残されていたものを回復させたのですから、この上もない喜びです。

彼らの喜びは、これまでの悲しみに裏打ちされています。悲しみが多かったからこそ、喜びはひとしお大きいです。「詩篇 126:4-6 【主】よ、ネゲブの流れのように私たちが元どおりにしてください。(注: 第二版では「私たちの捕われ人を帰らせてください。)」5 涙とともに種を蒔く者は喜び叫びながら刈り取る。6 種入れを抱え泣きながら出て行く者は束を抱え喜び叫びながら帰って来る。」帰還した民は、捕囚の時の悲しみがあったからこそ、それを通り越して喜びに変わります。

仮庵の祭りは、終わりの日の幻において、主が地上に来られた時、その御国において守られることが、ゼカリヤ 14 章に啓示されています。すべてのものが回復し、救いが完成した暁には、人々の喜びは最上のものとなります。涙、悲しみ、苦しみが全て取り去られます。

18 神のみおしえの書は、最初の日から最後の日まで毎日朗読された。祭りは七日間祝われ、八日目には定めにしたがって、きよめの集会が行われた。

祭りの間も毎日、朗読が行われていました。このようにして、律法を朗読することに力を入れていた、神の民です。その中で罪に対する悲しみ、悔い改め、そしてこの上もない喜びが満たされます。私たちも、忠実に主の命令にしたがって、聖書の朗読、解き明かし、熱心に調べることを続けていきたいと思います。